

〔縣門遺稿 四〕白猿物語

も、とせばかりのむかしなりけるとかや、さがみの國に住ける人にしの國に事やありけむ、海路をとりつ、ゆかむとて、ともなふ人みたりまたりもありけらし、あるみなとより舟出してけるに、いとあらまじきあらし眞風いたくおち來て、おもはぬかたにふねをやりぬるほどこそあれ、たゞ一時あまりがほどに、いく百里とも去ら浪にゆられつ、をゆけば、いまやくつがへりて千尋の底のもくづともなりなましと、いと心ぼそくおぼゆるに、とあるしまにふきいたりぬ、猶はやちのふきやまねば、舟の中にはとゞまるべくもあらぬ物から、いかなる島とも去らねど、人きそひおりつるに、島のたかさよこさいくばくしもあらねば、あなたのかぎりまで残りなく見はるかに、人てふものもなく、家てふ物も見えず、木たちものふりて去げきに、浪かせ枝をならすおとたかく、草はらおひつゞきてふかきに、みづしほなぎさをひたすこと遠し、げにはからずも、あやしき所に來にけるかなと、かなたこなた見わたすほど、ましろどもあまたひきつれて出來ぬ、たけきぎざしなきけものなれど、むらがりつれば、いたくおそろしきこ、ちす、○中ほらの中にひとつの去ろきましろすめり、これなむましろのをさなると去られて、こ、らましろどもつきしたがひかしづくさまなりけり、や、ありて其去ろきましろ、あまた木のみをとりに出してあたへつ、かの人うゑたりければ、よろこびてとりはみぬ、かくてより、ましろ、かの人を洞のうちにこめおきて、ひごとにつとめて出行つ、くさぐさの木のみをとりに來て、あたへけり、このましろ、めのましろなりければ、かの人といもせのまじはりをなさんことを、ねんごろにこひけるに、あさましとおもふものから、いたくうとみなば、この、ちいかならむもはかりがたくて、心より外にむつまじくあひわたりければ、ましろはいやましに心をつくし、こ、ろざしをはこび、朝なげにあさりして、はぐ、みやしなひけり、月日ふるがうちに、ましろみごもりてけるが、つひに子